

## ‘呪われた血’の叛逆詩人 (7)

George Goldon Byron

楠 本 哲 夫

### 目 次

#### 第五章 結婚——破局

本稿のテーマは

——バイロンが 病みて 漂泊う魂の救いを求めて 結婚へと  
踏切ったこと——そして破局を迎えた。その悲劇的道行と、  
そのルーツを探ること—— である。

1814年、——それは、Napoleno が Elba 島へ追放、そして Europe 全土に  
明るい未来の光がさしはじめ、浮かれムードが兆しはじめた年である。

詩人 Byron にも、飲めや唄えの歓楽の宴<sup>うたげ</sup>が華やかに続く。しかし  
<sup>みづか</sup>自らの破局がやがてくるであろうことは詩人は知りきっていた。彼の崇拜し  
た Napoleno と、<sup>みづか</sup>自らも同じ追放の運命の必ず到来するであろうことを詩人自  
身が最もよく知っていた。

それが、神の仕組んだ皮肉な運命のすれちがいとなるであろうことを。

詩人と Augusta は——

Newstead で、雪に閉ざされ、雪溶けの、1月17日から2月6日までの3週  
間、<sup>ちつ</sup>厳しい寒さの中を蟄居して温かい春の<sup>ひよし</sup>陽光を待ちわびていた。

1月22日、詩人は26才の誕生日を迎えた。Byron 家の慣<sup>なら</sup>わしによってその居

城たる、Newstead の the Abbey の城壁に祝旗を掲げるよう命じ、アテネより買い求めてきた四体のしやれこうべ ひつぎ鬘みづが棺の中に横わるのをじっと凝視していると、それらが息づいてきて不気味に語りかけてくるのを覚えた。

Augusta は——

詩人との盛んな情炎に燃えた、あの最初の同棲のシーズンの、さ中、8月に懷妊、指折り数えて、もう、かなりの身重だった。

詩人は、Augusta を Burun 家、代々の居城、Newstead の the Abbey につれてゆく前に Lady Melbourne に打明けた。

“私達二人の、この愛は、禁じられたものなるが故にこそ、他のすべての私の情事が きぬけた、味気ないものに思えるほどに深刻なのです。だが——それは、ぞっとする、おそろしい、やりきれない、たまらない、ほろにがいものを含んだ、しび毒ふぐに酔い痺れる 味なのです。”

二人の気持は、しかし、とても異質なものであった。二人が、各、その自分の気持を固執することができなくなった場合、この愛は彼女の弱さ、脆さとなり、詩人の愚かしさ となっていたであろう。いや—もつと悪い事態となっていたらうものを。

“どうか、私に対して、彼女のことを、そして一切の因果を、そんなに激しく、厳しく責めたてないでください。”と Lady Melbourne に訴えた。

もし——この腹心の仲、Byron's confidante、—— Lady Melbourne でさえ、この二人の愛をきつく詰るのであれば、その真相が世間に曝かれたとき、月並みな世人は、どのように さわ騒ぎたてることだろう。

しかしながら、さしあたって 世間は、政治的理由で Byron を呪うことに忙殺された。

ヨーロッパの君主たちは諸方からナポレオンを攻めたてた。The Tories 王党派たちは勝利を感知していた。これは Byron が彼の Lines to a Lady weeping を本名で再出版することを決意した時期だった。

the ‘Lady’ は Wales の Chalotte 姫のことであり、彼女は 彼女の父が Prince Regent 摂政王となるや the Whigs 党を脱党したことを慟哭し悲しんだがそれは1812年のことだった。

論評界が Byron を——‘畸形の Richard III 世’、‘無神論者’、‘叛逆児’、‘悪魔’——として 悪し<sup>あ</sup>ざまに 呪い、連呼し、ヒステリックに狂乱し憎悪したとき、この狂態に敢然として戦闘的に立ちむかい、これを、はねかえした。

詩人は Lady Melbourne に、

“私の心の奥底には、私に敵対する者を はねっかへす闘志が 漲っているのです” と書き送った、が、それは——詩人の脳裏をかすめ、そして 反響<sup>こだま</sup>して、遂に、Childe Harold の最後の canto にとび出してきた あの文句 であった。

But there is that whithin me which shall tire Torture and Time, and breathe when I expire....

だが、しかし——

私の心の奥底には

あの ‘苦悩’ と ‘時’ を

へトへトに疲れさせ、

そして それは——

私が 死ぬときも

いきづ 息き続けるもの——が

秘んでいるのだ。!

熱血詩人 Byron は 己が不滅の闘魂<sup>とうこん みづか</sup>を自らの筆で 力強く謳<sup>うた</sup>い 讃<sup>たた</sup>えている。

Europe 全土を 席捲した嵐、—Napoleon の Elba 追放—→1814年、の春一番——その間、詩人は終始、傍觀的政見を維持し続けることにより 自らの精気を保ち得た。

“私の政治は 私にとって 一人の老人に対して若き恋人の寄せる あつき情<sup>こころ</sup>に似たものなのです。政局が悪化すればするほど、私の血は それだけ激しくさわいでくるのです。” と 書いた。

さらば、祖国よ。

.....

祖国は、いま、わたしを捨てた——

だが、祖国の歴史の中で

最も光輝ある、最も暗黒なるページは、

わたしの名声で満たされているのだ。

.....

さらば、おんみ、フランスよ。!

だが、おんみの諸地方に、もういちど、

自由が回復されるとき、

そのときに、どうか、

わたしを想い起こしてほしい

.....

すみれ草は、変わることなく、

おんみの深い谷間に萌え出るのだ。!

.....

**NAPOLEON'S FAREWELL**

[FROM THE FRENCH]

1

Farewell to th Land, where the gloom of my Glory  
Arose and o'ershadowed the earth with her name—  
She abandons me now—but the page of her story,  
The brightest or blackest, is filled with my fame.  
I have warred with a World which vanquished me only  
When the meteor of conquest allured mo too far;  
I have coped with the nations which dread me thus lonely,  
The last single Captive to millions in war.

2

Farewell to thee, France! when thy diadem crowned me,  
I made thee the gem and the wonder of earth,—  
But thy weakness decrees I should leave as I found thee,  
Decayed in thy glory, and sunk in thy worth.  
Oh! for the veteran hearts that were wasted  
In strife with the storm, when their battles were won—  
Then the Eagle, whose gaze in that moment was blasted,  
Had still soared with eyes fixed on Victory's sun!

3

Farewell to thee, France!—but when Liberty rallies  
Once more in thy regions, remember me then,—  
The Violet still grows in the depth of thy valleys;  
Though withered, thy tear will unfold it again—

Yet, yet, I may baffle the hosts that surround us,  
And yet may thy heart leap awake to my voice—  
There are links which must break in the chain that has bound us,  
*Then* turn thee and call on the Chief of thy choice!

July 25, 1815. London.

[First published, *Examiner*, July 30, 1815.]

このうたは、フランス語からの翻訳とされているが 勿論、Byron 自身 が Napoleon によせた、この英雄の心境をうたった悲歌であり、讃歌である。

悲運の英雄 Napoleon に、破局が迫ったとき、Byron は彼の journal の中で 世に挑むが如く 書いた。

‘私は Napoleon が 勝つことを 信じ、それを望んでいる……’

4月6日、‘悲しく<sup>いみな</sup>嘶く遠吠えをのこしつつ’ Napoleon は 不名誉な退位を迫られ、退位したという報が とどくや、詩人は、ただちに筆をとって ‘Ode to Napoleon Buonaparte を一気<sup>いっぺん</sup>に書きあげた。それは——‘ナポレオン、ボナパルテに寄せる賦’ として、彼 Byron が Napoleon にむかって、この失脚した——詩人の偶像視していた——英雄に対して、“貴下は、何故、あの岩に縛られた Prometheus<sup>1)</sup> プロメテウスの如く最後まで敢然と挑戦しきらなかったのか?” と激しく責めたてた叫び だった。

Ncte 1)

ギリシヤ神話。天上から火を盗んで人間に与えたため Zeus の怒りにふれ 巨岩に鎖で縛られ、毎日、はげたかに肝臓を食べられ、のちに Hercules に救われた。

Napoleon の退位の8日後、1814年、4月14日、Augusta には、Six Mile Bottom で女兒 Elizabeth Medora Leigh が 産まれた。

この女兒 Medora の父親は Byron 卿であったのだろうか。

この女兒の父親がはたして詩人であるか、否か、をめぐって世間はやかましく騒ぎ立てた。

詩人は、Augusta との Newstead での同棲、のことで、ひどく心を痛め、不安を感じていた。

Lady Melbourne から—“Augusta との間に子供をつくるのが、それだけの、価値があることなの？”ときかれたとき、

“ああ。それは、一だが、価値があることなのです。その理由は、言えないのですが。そして、その児は 絶対 ‘Ape’——鬼子——ではない、であってはならないし、もしそうであれば、それは私の罪とならねばならない。”と答えた。

詩人は多分、近親相姦によって生れた児は Monster 鬼子 であるという中世の迷信を怖れ、そのことに言及したのであろう。あるいは、もっと一般的通念として、懷妊中に衝撃を受けた妊婦の産んだ児はきっと 不幸な 障りに祟れるという不安を口にしたのかも しれない。

詩人が、この昔の時代の妊婦の話信じたことは、かなりなものであって、後年、詩人の妻となった Annabella が懷妊中、その足指をオームにかまれたとき、詩人は、激しく、逆上したことによっても うかがわれる。

Annabella が ‘a winged child’ を産み落すかもしれぬ と迷信的不吉な予感に襲われ、そのオームを籠ごと窓の外にほうり投げてしまった。

そのオームは、その後、生きながらえて、詩人よりも、もっと哲学的に、主人にむかって、只一言、“Johnny!”——“この、親ゆづりの氣狂いジャック 奴”——と、突然、叫び出すのだった。

Medora の出生に関して、詩人には、このような不吉な不安はあったものの、Medora が Augusta の長女——Leigh の女兒——Georgiana をしのいで 格別に 詩人の寵愛を独占することはなかった。

とはいえ、詩人は Medora を ‘My Georgiana’—‘僕のジョージアナ’—と呼び、‘a beauty’ ととてもきれいなかわいい児だと、可愛いがったが、他の女兒たちは、それに比べ、きれいな児、だが、ただギャーギャーと泣きたてるうるさい存在だったようだ。

詩人の庶出の女兒 Allegra に対しても、また、庶出の男児に対しても、そうであったように、この Medora に対しても、これといって、特別に将来のための生活設計をやしてることも、Medora のための詩を特によんでやることもしなかった。

Medora の出生に関しては——懷妊と出生の日より算えて、Colonel Leigh が、その父親であることは、無理だという論議は、しかし、Colonel Leigh が 7 月、の the Newmaret meeting の期間中、London で、又は、Six Mile Bottom でそうしようとすれば Augusta に会うことは できたはずであるという考えも成り立つわけだが……。

とに角、このことについて、独断的な答を与えることは出来ない。おそらく、Byron 自身も、いくつかの疑点は抱いていた。たしかに、いろいろの疑点は、依然としてのこるであろう。

‘この年の春’を Byron は ‘the rabblement of royalty’ と呼んだが、それは 夏へと移りゆくにつれ ‘お祭り騒ぎ’ へと エスカレートしていった。

6 月と 7 月には、the Prince Regent は 各国の君主や凱旋將軍を招いて、うち続く盛大な祝宴を催した。

ロンドンでは全市をあげて Wellington, Blücher, そして Tsar Alexander のために 熱狂的に騒ぎ立った。

最初は しかしながら 長びいた冬の後で Byron の健康は この祭り気分



にのって、浮かれ騒ぐムードに ひとり得なかった。

しかし 再び始めた dieting 規定食 と Boxing のおかげで、最高とはいわないまでも、祝宴に加わるのに十分な健康を何とか、取り戻すことが出来た。

ときに詩人は、猛烈な、のどの<sup>かわ</sup>渴きを覚えそれを癒<sup>いや</sup>すために一夜に15本のソーダ水をのむこともあった。

Tom Moore の記憶によれば、ある日の Byron の食事は——安全食として——ホットな湯とストレートのブランディーとを交互にのみながら、いせえびの肉を 喉に流し込むものであった とのべている。

そして、‘Lara’——‘The Corsair’の続編。詩人の東洋風物語のもう一つの作品——の執筆は、情事からの疲労の息抜きとして、ボクシングや、ブランディー以上に もっと効果的であった。

この ‘Lara’ は、Byron が出版社から、payment (700ポンド) を受取ることを承諾した最初の詩集であった。

これまで、詩人は、プライドの故に、出版社の提供しようとする payment の額に応ずることを拒否し続けてきた。

この同じ年、出版社 Longman は、その<sup>ひいき</sup>最とした詩人 Thomas Moore に、‘Lalla Rookh’ に対する payment 3,000 ポンドを支払った。

(1816年、Byron は、‘Childe Harold, Canto III’ と ‘The Prisoner of Chillon’ の2つの作品を併せての payment として Murray 社から 2,000 ポンド受け取るようになった。)

‘Lara’ は、——Conrad (and Byron) の場合、同様——

幼き日より、ずっと ‘Lord of himself’ であったことが、‘悲しみの遺産’を

承け継ぐことであり、罪 sin に向うのみのチャンス<sup>を</sup>を賦与する‘恐怖の五国’  
を彷徨<sup>さまよ</sup>うこと、犯罪 crime へ向う‘無数の小道’を徐々に降りてゆくこと、で  
あると覚った。

しかし、Lara は、実のところ、Conrad の‘無数の罪’から、何一つ学び取  
ってはいない——。また、Rousseu のような、natural freedom に迫り着くこ  
とにも成功しなかった。／

Conrad も Lara も、依然として、自らの衝動<sup>みづか</sup>のおもむくがままの、‘情熱の  
奴隷’に過ぎなかった——そして、誰一人として、‘passion の奴隷’でない者  
は この世には いないように。

Behold—but who has seen, or e'er shall see, Man as himself——  
the secret free?

見よ、／ だが、誰が覗<sup>のぞ</sup>き見たか、いや、  
覗きみることができのだろうか  
みづからの姿を、  
秘められた、自らのところを そのまま。

Note 2)

Lara [la; ra]

Byron の heroic couplet の物語詩。(1814)。

The Corsair の続編。

主人公 Lara(実は海賊の首領—Conrad) は、小姓 Kaled(実は、彼の愛人 Gulnare)  
を伴って Spain の領地に帰り、謎の生活を送っている。

種々のいきさつを経て、宿敵 Ezzelin と戦い、Kaled の腕に抱かれて死ぬ、という  
筋。

この詩の興味は Lara を描いた筆に Byron の自己分析を見うる点にある。

この1814年のシーズン、Augusta は、ふたたび詩人につきそって暮すことに  
なったのだが彼女の周囲で依然としていろいろとごたごたが、展開してゆく。

Byron は、3月28日、Piccadilly の、the Albany の一階のアパートに引越していた。Althorpe 卿が結婚に際して これらの部屋を詩人のために明け渡してくれていた。

“私には彼の暮していた広い独身用アパートが手に入った。それは あたかも、私の前途が 今や <sup>ひょうびょう</sup> 縹 渺と広がり 平穩となりゆくようだ。” と言った。

しかし、こまったことが、やがて はっきりと 現われ始めた。

Caroline Lamb がふたたび 詩人に つきまとい始めた。

彼女は 詩人の家の戸口の前にひそんでいて、召使が戸をあけるやいなや、さっと、とびこんできた。

ある日、彼の不在中、しのび込んで、彼のテーブルの上に Vathek<sup>3)</sup> がおいであるのを知って、その中に ‘Remember me’——私のことを忘れないで——と書き込んだ。

帰宅して、これを知った Byron は、Caroline の書き込みの文句の下に、さっと、次の詩行を書き加えた。

それは、もっぱら呪ひ役の Vathek でさえおどろき舌をまいたであろうような呪いの詩行で、次のように記された。

Remember thee! Aye, doubt it not;  
Thy husband too shall think of thee;  
By neither shall thou be forgot,  
Thou false to him, this fiend to me!

あなたのことを覚えていろって、!

あー、そのことは疑うなよ。

貴女の夫も、貴女のことを想うだろうよ。

貴女は どちらからも 忘れられないだろう。

そうすれば 貴女は、

貴女の夫に 不貞であり

私にとっては 悪魔なのだ。

Note 3)

Vathek [væ'θek] an Arabian Tale.

W. Beckford の小説。原文フランス版は、1786出版。

Eblis—悪魔—to仕える Caliph Vathek は、50人の小児を虐殺するなどの悪業を重ねた末に、恋人 Nouronihar と共に Eblis の地下の殿堂に入ることを許されるが、ここで永遠の呵責をうける。

この物語には付け加えられた3つの挿話、

Episodes of Vathek は

Sir F. T. Marzials の英訳となり

1912に 初めて出た。

いわゆる Terror story の一つである。

Caroline は、しかし、Byron が彼女にやさしく唇<sup>くち</sup>づけして

“可愛そうな Caro よ、誰もが 僕を憎んでも、いいね、君は絶対、心変<sup>おも</sup>わりしないね。” と ささやいた日のことを憶い出した。

そして詩人と Augusta との仲を、Lady Melbourne が詰り<sup>なじ</sup>、誹謗<sup>ひぼう</sup>した手紙を示されたことも覚<sup>おぼ</sup>えていた。

Caroline は Melbourne (her mother-in-law) の机の引出しを、かきまぜて捜<sup>あ</sup>すことぐらいは 敢えて やってのけた。

彼女は 何事においても とどまることを知らなかった。一枚の写真を手に入れるためには、あるときは、実に、手紙を偽造することさへしたこともあった。

詩人は、今、Caroline を、‘狂女、そして、魔性もつ悪女’と呼んだ。そして彼女に浴びせかけたこの痛烈な皮肉、罵倒の声——それは、詩人が己自身に浴びせかけた vitriol 刺<sup>とげ</sup>もつことば——でもあった。

“過<sup>と</sup>し方<sup>かた</sup>の、我<sup>わ</sup>が愛を考えると、姉 Augusta に対する以外に、誰に対して自分が一体、虚偽であり、悪魔であった、というのか？

Caro よ、貴女<sup>あなた</sup>なんか、僕から極悪非道に扱われたうちには入らない。”

詩人は、Lady Melbourne に書いたように——詩人の Augusta への愛は、ある意味では、悪魔的愛、極悪非道の愛であったのである。

しかし——

彼のうちなる悪魔を退散させるべく、世<sup>ならはし</sup>の慢習による救いの道<sup>とぎ</sup>は閉ざされているわけではなかった。——それは、

Lord Althope の如く、独身アパートを引払って結婚へと踏み切ることであった。

結婚の候補としての女性には事欠かなかったが、詩人にふさわしい相手がみつからなかった。

友人の Tom Moore は Lady Adelaide Forbes の魅力を盛んに説いたが無駄だった。というのも彼女のプロフィールが まったく、Apollo Belvedere だったから。

Frances Webster の妹たちは二人とも、とても、美しかったが、さほど、知性的でなく、そのため、あまり気のりがしなかった。

Mary Chaworth は、夫 Mr Musters とはすでに別れていたが、再び、Byron の femme fatale 妖婦 となることを 必死の思いで 劃策した。

詩人が Augusta と 休日<sup>を</sup>をたのしんでいた Hastings で 何とか彼をつかまえようとしたが、彼女の狂ほしきまでの手紙には返事を書かないで、詩人は彼女が着く寸前に さっさと雲隠れしていた。そのため 可愛そうに、彼女は発狂してしまった。

思いおこせば——

この女性、Mary Chaworth こそ、詩人の多感な少年時代、Harrow 校での最高学年を彼女を慕って焦がれて失恋のあまり学業を一時 放棄した、詩人にとって高峰の花、理想の女性、だったのだが——

Augusta が Byron にとって もっと しっくりゆくような一人の女性を紹介する。

彼女は、初々しい友人、Lady Charlothe Leveson Gower である。

かもしか 羚羊の如く shy and pretty <sup>はづか</sup>羞しがりの、愛くるしい——Byron 好みの——女性であったが、何故か、逃げ足の早い、その、羚羊の習性さながらに、——Augusta が誠意をこめて、言いよったにもかかわらず、——9月9日、詩人に宛てさっさと拒り状<sup>きりじょう</sup>を書き送った。

一方、Lady Melbourne も、自分の持ち駒である、姪、Annabella が、今、なお、脈がないでもない、いや、ありそうであることに感づいていた。

事実、Annabella は、ここ、数ヵ月間、伯母 Melbourne が自分のために尽力してくれた以上に、みづから、候補者としてもっと効果的にふるまいつつあったのだ。

多くの立候補者群の中から、慎重派の、Annabella Milbanke が、突如として、自ら烽火<sup>みづか のろし</sup>を上げた と考えられるふしもある。

それは——

1813年、8月22日、ある決意を秘めて、詩人あてに——その後、次々と——沈

黙を破って、手紙を書き送った。

しかし、報われることのない 純愛を、彼女が、自分の恋愛哲学として、Byron にむかって切々と説き訴えたとき、その自らの意中、動機は相変わらず、つねに胸深く秘めて明らかにしなかったけれども——。

彼女の動機は、Platonic friendship プラトニック、な友情として提供された。すなわち——

“プラトニックな友情とは、絶対に愛へと移行することはないけれども、世間的、一般的友情以上のものであると価値づけるに値するものである。”と彼女は 説いた。

8月28日、Byron は、彼女の友情をみとめ、受け入れ、そして こう付け加えた。

“その友情を、——貴女の説くプラトニックな友情を——私は心から貴女に捧げたい。しかし、私には、私自身に対し信頼がおけないという引け目があるのですが——。

私は、私が貴女を愛することを避けることが果して出来るだろうか と考えるとき、私には自信がないのです。それは、出来ないのではないかと危ぶまれて、自信がないのです。”

ここに書き送った手紙の中で、詩人は、Annabella に対して、彼女の生涯を通じて、最も高揚され、浄化された気持で、彼女の訴えを 受け容れたものと考えられる。

Byron をめぐる数多くの女性群の中で、Annabellaこそ、<sup>さんぜん</sup>燦然と群を抜いて光り輝く存在であった。Annabella の知性、総明さ、人生に立ち向かう真剣な

philosophy, そして 最も控え目な態度 あらゆる点で、慎重であったこと——  
一流石がに 詩人が、これにうたれ、受け入れ、傾倒していったものと考えら  
れる。

しかし——

いかに総明な、慎重な女性であっても、この時点において、この狂乱の詩人と  
の出会いが、必ずや悲劇的破局を迎えるであろうことを、看破くことは 出来  
なかったのであろうか？

Annabella の自ら口にし、訴えた、“platonic friendship は絶対に愛へと  
移行することはないのです” —という彼女の philosophy が、やがて この狂  
乱詩人への、奉仕的、献身的 母性本能へと移行してゆく 萌芽を孕んでいた  
ことを Annabella 自身 予知していたのだろうか？

Annabella は、——そのことへの自覚、予知の有無は、戻も角も——この詩  
人のために、自分を賭けてみてもよい という、すくなくとも、無意識のう  
ちに、母性本能を駆り立てられたとも考えられるふしはある。それほど、詩人  
に対しては真摯な態度で 対峙した。

二人の関係は、1812年、詩人のプロポーズを彼女が拒ったことを考えるとき、  
今は、Annabella が敢えて その復活を望んだよりも、もっと進んでいた。

この二人の間の新しい進展について、詩人は後年、次の如く述懐している。

“友情というものは 若きレディー達にとって危険なことばである。

それは全身、羽毛におほわれた愛であり、——育てられれば愛となり——晴  
れて飛翔の時を待ち焦がれている。”

その飛翔の日は、——到来するのに一年余りかかった。



その間、Annabella は、Seaham の、その雛<sup>ひな</sup>の巣で 温<sup>あたた</sup>かく育<sup>はぐく</sup>まれながら  
もっぱら、翔<sup>と</sup>び立つ日を待ちつづけていた。

戦勝気分<sup>に</sup>酔う歓楽のパーティーに出かけてゆくこともなく ひっそりと  
自分の巣に籠<sup>こも</sup>って 詩人に 自分の懐<sup>おも</sup>いを送りつづけた。それは、しばしば、  
ものすごく冗漫な、曖昧な、詩人への助言<sup>はげ</sup>、励まし<sup>の</sup>言葉でもあった。

詩人自身は、ときおり、love call を送りながら 未だ熟さざる幸福のときを  
まっ一方、つねに目ざとく看<sup>み</sup>守りつづけた。

1813年も 暮れゆく頃、その意中を、自分の journal に 書きとめた。

“昨日は、Annabella からの手紙をうけて、その返事をかく。二人の仲は、  
なんて、ちぐはぐな状態、なんて変てこな友情、を保っていることだろう！  
どちらの側にも、愛の火花<sup>あいの火花</sup>がパチリと音をたて 放電する一瞬もなく……。”

Annabella は 詩人に、自分からの便りは伯母の Lady Melbourne には  
見せないようにと頼んだ。しかし Melbourne は、二人の仲の進展を望んでい  
ることを 詩人は察知していた。

1814年3月、詩人が Annabella に対して 再度、求婚して、再度、拒否さ  
れた という噂が 流れた。

そのことを詩人が Annabella に警告したとき、彼女はそれに返事を書いた。

“私が再度 拒否したなんて噂されても、 あらためて、再度、求婚されても  
いないのに、どうして 再度 拒否できるの？”

と含意ある文句をはのめかした。

そこで、詩人は、このたびは、日誌にこう書きとめた——

“ひょっと また 彼女を恋するかもしれない、気をつけないと……”

Annabella は The Corsair' を読み了ったところであった。そして これは、詩人が、人間の心——その奥に秘められた——の動きについてシェクスピア風の英知を明らかにしたものだ<sup>あき</sup>と解釈した。

Annabella は、自分の心に秘めた奥底を、Byron が推しはかってくれることを望んでいたのである。

その翌月、Annabella の父は、Seaham に逗留するように 詩人を招待した。

Byron は his Tante, Lady Melborne にその意中を打ち明けて

“私は今、Annabella と恋におち入ってはいない。しかし ‘A warm June’<sup>あつた</sup> 温かい5月 がくれば、私が彼女を恋しないと予知はできぬ。” と告げた。

真剣に、彼女を、‘とてもすばらしい女性、a very superior woman’ として尊敬した。しかし、結婚の相手としての適格性については ‘a little encumbered with Virtue’ ——すこしばかり美德にじゃまされている—— と書き送った。

Lady Melbourne は、Annabella のことで詩人にたえず警告しつづけて、“Seaham に Annabella を訪ねよう” 詩人を促した。

a warm July ‘温い5月’ がやってきた。そして Wellington 将軍の凱旋記念パーティーの仮装舞踏会場で、Byron は、修道僧に変装して 友人と Platonism のことを論じていた。そのとき、彼は、控え目な Annabella よりもむしろ、従姉の Caroline から、うるさくつきまとわれた。彼女が 自分の green の Pantaloon——19世紀の細くピッタリとしたズボン——を、これみよがしに 見せびらかすので詩人は、これをたしなめる一幕もあり、詩人は、ここでもまた、<sup>にが</sup> 苦い懷いに眉をひそめた。

この月、詩人の Seaham への訪問は見合わせたの運びとなった。というのは、Annabella の伯父の Lovd Wentworth が病気のためだった。しかし、このことを、わびる手紙を Annabella は詩人に送ったが、その意中には、Augusta と詩人との仲への、疑惑が、詩人との出合いを気まづくさせることへの不安があったようだ。

Byron は Augusta のことを ‘A+’ と呼び Annabella のことを ‘A’ と呼んだ。

‘A+’—‘B’ そして ‘A’—‘B’ そして ‘A’—‘A+’ の三角関係が もやもや と だらだらと いつ果てるともなく 宙ぶらりんの状態で進行していた。

Annabella は、理知的な彼女は、そのもやもやを はっきりさせたかった。その意中をつつみかくさず Byron に打明けた。

“貴男が Augusta へむける愛を私が考えて、私が彼女ヘライバル意識をもったことは私のまちがいだったのです。

私は これまでずっと まちがった風に想像していたようですワ。しかし今、私には、何一つ貴男との結婚へとふみきるべく、私を誘発するものは 無いのです。 貴男自身のお考えは どうなのでしょう？ 貴男は今、ひょっとすると、貴男の心の平和をかき乱すかもしれない、私への貴方の愛情が、 危機にひんしていると 考えておられるのではないのでしょうか？ もし、そうであれば、どうすれば、その危機状態が避けられるのでしょうか、 貴男に卒直にお尋ねしてみたいのです。”

8月10日、詩人は返事を書き送った。

“私は 出来るかぎり 腹藏なく お答えしよう。 私は、はっきりと 貴女を愛した！ 今も、そうです。そしてこれからも 貴女を愛しつづけるでしょう。”

このような、あけっぴろげな詩人のことばは、ただ 彼女をいらだたせ、彼女はもっと協道へとそれてゆくだけだった。immortality を求めて、これを渴望する彼女には、依然として 彼を、自分の ‘導き’ ‘支え’ ‘この世での、お手本’ として 選ぶことが出来なかった。

彼もまた、そのような宙吊りの状態におかれて、その態度が硬化していった。

“では、結構。ちゃー、話題を変えよう”と返事をした。

彼は、事実、別のことを考え続けていた。彼は Augusta とその子供達を Newstead へつれてきて同棲していた。

そこから Augusta が 詩人のために、Lady Chalotte Leveson Gower に求婚状を送ったのであるが——

もし、このとき、この“活き活きとした <sup>かもしか</sup> 羚羊の如き Charlotte から、早や早やと OK の返事があったら、Annabella と詩人の糸は プツッリ と切れてしまったであろうのに—— 既述の如く、Charlotte の拒り状が早速送り届けられた。

そして、この間の事情を—— 奇しくも、Caroline が後年、この詩人と Annabella との、ぐづついた仲を、“あれは、Annabella のいたづらだったのヨ。  
‘dance of an elephant’ ‘象の踊り’ だったのヨ。 と述べた。

しかし、この羚羊嬢から No の返事が届いたその日、 9月8日に 詩人は Annabella 宛に 再度 求婚状を送った。しかし、この求婚状は 試験的なものであった。

“貴女が、それとなく 匂はせた、結婚への異議、反対は、どうにもならないものなのですか。それとも、その気持は どうか変えられうるものなのですか。私の方の努力で変えられ得るものであるならば……”と書き送った。

Augusta は、かねがね、この求婚を、思ひ止らせるようと努めてきた。 というのは、彼女も、Moore も、Annabella が Byron が期待したほど資産家でもなく、彼にとって彼女はあまりにも strait-laced (かたくなるしい) であると考えたから。

それにも、かかわらず、Augusta は、 この弟 Byron の手紙が あまりに

も“可憐”であったので 黙殺するわけにもゆかなかった。

8月13日以来、二人の間には、たびたびこの浄らかな手紙が やりとりされた。

そして Annabella は今、自分の将来は、この結婚によって——詩人と結ばれることで——この手紙のように、<sup>きよ</sup>浄らかなものになりゆくのだ と信じこんでしまった。

というのは、9月9日の Byron の手紙の中で、彼は、“自分は貴女によって私の性格が改善されてしまった。そしてこれからも改善されてゆくだろう。——そして又、私は貴女を愛した。愛し続けることだろう”と書き送った から。

果して 彼のもとに、彼の期待した以上の返事が彼女から送り届けられた。

彼は、しかし、9日間 その求婚の返事を不安の思いで 待ちつづけた。

もし仮に Annabella が彼の希望の可能性はない と主張した場合——彼は彼女のいわゆる ‘a pledge’ は 望まなかったのだが…… ——Hobhouse と Italy の Venice に出かけ、あるいは、Alps で Parmesan cheese で 彼女への失恋の気持を慰やすことはできるのだぐらいの軽い考えだったのである。詩人の Annabella への恋心は、その程度のものだったのだろうか。

彼女の結婚承諾書は9月18日に届いた。そのとき、Byron は 気が遠くなるのではないかと Augusta が思ったほど 顔面蒼白になった。彼が望みもしない誓いのことば——を受けとった。“私は、貴男を幸福にしてあげて生涯の私の第一の目的とするよう私の心に誓ひます。そして事実これまでずっとそう心に誓ってきました。Crede Byron、私は 私が尊敬する<sup>すべ</sup>凡てに対して、私が愛することが<sup>すべ</sup>できる凡てに対して 貴男に頼るつもりです”と書かれ

ていた。

Annabella から求婚への承諾状が届いた、ほんのちょっと前に、the Newstead の館の園丁が、母のかたみの、長い間、行方不明だった結婚指輪を届けてきた。

詩人は、Annabella からの手紙を Augusta に手渡ししながら It never rains but it pours, と—— ‘不幸は二度、三度と重る’ だろうと言った。

詩人は、この掘り出された、不吉の指輪は——もし、Annabella が 結婚を受諾したら——花嫁の指にはめさせようと心に決めていた。

そして今、彼女が求婚を承諾したことだけでなく、その承諾状の副本を Albany へも送ったことを知った。Augusta は今までの手紙の中でも、今回の手紙が 最も ‘浄らか’ なものであると 思った。

しかし、詩人は 実はこの結婚にあまり気のりしなかったようである。むしろ、自身では そのことを否定したが Lady Melbourne は Byron の ‘いい加減な気持’ を見抜いていた。事実、彼は 彼女に、‘私が貴女を——Aunt 私の伯母——と呼ぶことが出来るのを どれほど私が望んでいるか、とてもわかっては もらへないでしょう’ と書き送っている。——この気持に比べれば、Annabella を妻と呼ぶ 願望など とても 及びもつかぬものだった。

詩人が Annabella に二人の婚約はあまりにも遅すぎたとはっきり口にしたことも 不吉な前兆であった。

“それでも私は 幸福になりたい。貴女と共に私は、きっと、幸福になれるだろう。しかし過ぎ去った月日に得られたであろうほどの幸は戻ってこないであろう。” と明言した。

彼は 2年前の Annabella の拒否のため、自分の性格改造のチャンスは逃げてしまった。そして一方、Augusta と共に破滅への道を掴む致命的チャンスが与えられてしまったと言いたかったのである。

こうして、この“too late” —手遅れ<sup>ておく</sup>—なる主旋律は詩人の口から 幾度となく Lady Melbourne に、そして Annabella に、Lady Jersey にも 繰返されたのである。

もう一つの不安、心配は、Annabella には自分のむら気はコントロール出来ないのではないかという点であった。

“彼女は私を支配し得ないのではないかと おそれる。そしてもし——彼女が私を支配しないならば この結婚は 何の意義もないであろう”

しかし Byron は、それにも不拘、希望にみちて みづからを Lord Annabella と 呼んだ。

彼が Hobhouse を bestman（花婿付添の男）として招待したことは、この友が同時に妻をめとることへの詩人の願を意味した。

そうすれば四人が 同じ鎖でいっしょに 帯電する人間のようにカップルになれるであろうという希望によるものであった。

Seaham を訪れることが ぐずぐずと延期されたことは さらにもう一つの危険信号であった。

9月に Moore に告げたのだが、もう10ヵ月間 Annabell と会っていなかった。

しかし、Byron の財産を夫婦契約財産にくり入れることで顧問弁護士 Hanson が手間取ったことや、彼自身の気力の衰え、やらで 詩人が Seaham の彼女の家に着いたのは もう11月も2日になっていた。

9月20日と10月27日の間の 2週間のうちに、Byron は 3回、花嫁 Annabella のことを Othello の中の Desdemona<sup>4)</sup> デズデモーナと呼んだ。

Note 4)

Shakespeare の悲劇 Othello の貞節な女主人公

1814年9月、詩人は、Annabella に再度、求婚、婚約。11月2～16日 Seaham の Milkbanke 家に滞在。

二人の再会は幸先の良いものではなかった。というのは——

Annabella は、おし黙って極度に緊張して過労気味で、そのため、Byron は、“彼女は、ひょっと、自分を愛していないのではないか？”と不安を覚えたほどであった。一方、Annabella も Byron に対して同棲の、不安な印象を抱いたので、婚約を解消することが、詩人を、緊張より 解放することによってむしろ救うことになるのではないかと考えて、事実、その旨を口にした。

Annabella が、そのことを切り出したとき、Byron は 即座に、気が遠くなっていった。

“そのとき、Byron が、自分を愛してくれているにちがいないことを、確信した。” と——彼女は、そのときのことを憶いだして——後年、 Mrs Beecher Stowe に語っている。

“そしてほんとうは、彼は 貴女を愛してはいなかったのネ。” と反問されたとき、Annabella は 淋しそうな表情をたたえて、

“実はそのとき、Byron が気絶したのは、Augusta との情事が発覚するのを怖れたためだったのヨ。” と答えている。

11月2～16日の2週間、詩人は、Annabella の、Seaham の家に滞在した。

しかし “Byron が、挙式の日まで、自分の家に帰っていたほうがよいのではないだろうか” と彼女は推断した。 というのは——

Annabella としては、Byron の 誘発的性行為は、実は、この婚約同棲の期



間中、勘定に入れてなかったことであるし、

Byron としては、——性行為のうまく、しつとりと、とけ合わない、という面ではないとしても——お互の性格面で 相容れない、しつくりと 噛み合わないことをすでに、看破っていた。

この挙式前、わずか2週間の Seaham での同棲期間中、Annabella は 終始、詩人に対して 誠意を尽して 奉仕したことで既に 心身ともに 疲れ果てて しまった。

Annabella は——

Byron を優しく導くことによって とても従順になり 扱い易くなってくれたら と願い、彼の望むままにして 次第に慣らしてゆこうとしたのである。その気持が裏目に出て、自分の理性が失われ、むしろ、そのとき、そのときのおもむくがままの感情の流れに流されてゆくことのほうが好ましいのではないかと考えるようになった。

そのため Annabella は3日おきに 病気になるという仕末だった。

Byron は Lady Melbourne に打明けた。

“二人の仲は ときに とてもしつくりして、 ほんとうに、あまりにも相似た者 同志に見えるのですが、次の瞬間、まったく相容れない、異質のもの者同志となるのです。”

この不一致は 彼女の体質によるものであったのだろう。だから——  
彼女の諸の考え方をもろもろを 悪魔的なものと対峙させ 照合させるならば Annabella という女性の体質、本質に触れることが、出来たであろう。自らに対し偽わりの一つの汚点さえ許さない、誠実な、厳しい、女性であった。

事実 Annabella としては、  
Byron を御してゆくのに——

Augusta が 詩人を、そうしたように 母性愛的に、一人の母親として、わが  
児に對するように扱う、つまり、play him by ear' (樂譜なしで弾く) ことは、  
到底、至難<sup>わざ</sup>の技で、不可能なことだと悟った。

詩人を救う という同じ願いを この二人の女性が 各の心の奥に秘めなが  
らも、Augusta *can* play him by ear! そして Annabella *can't*. という根  
本的に異なった、全く対照的な体質が浮き彫りにされている。

Annabella は、そのような体質のゆえに、詩人の愛撫に対しては とても優  
しい女性になりきったのであるが 詩人の激しい動きには とても感じ易く、  
反応を示し、心身 の疲労が激しかった。

Byron と<sup>しとね</sup>褥を共にした<sup>あまた</sup>数多の女性群の中で、真の意味での、悲劇的運命を生  
きた二人の女性を挙げるならば——

それは、Augusta と Annabella であろう。

Byron が Seaham を去って、ひとりつきの生活に戻ったとき、Annabella  
は、また自分に立ちかえることができて、詩人への、結婚への、自信が次第に  
<sup>よみがえ</sup>蘇 ってくるのを感じた。

Byron は、これに反して——

結婚への気持が、次第に退潮してゆくのを感じた。最後の瞬間まで、この結  
婚から逃避したいと、今は、自暴自棄的、必死の努力をこころみた。

“その暗雲も、やがては、消散するでしょう。あなたの意のままに おやりな  
さい。”

Milbanke 家の両親はとにかく、前向きに、事を選び 結婚へと踏みきるよ  
<sup>のぞ</sup>う希んでいる旨を詩人に伝えた。

その年の暮もせまって、詩人は、Bestman の役を快く引受けてくれた——  
John Cam Hobhons<sup>こころよ</sup>e と共に、挙式のため Seaham の Annabella の家へ  
向った。しかし、途中、この結婚に気のりしなくなった彼は、クリスマスの  
ため、Augusta のいる Six Mile Bottom で旅を中断し、そこから書面でこの  
結婚を破棄する旨を書き送ろうとした——しかし、Augusta がこれを制止した。

Hobhouse は Byron が花嫁 Annabella に対して、いまや、無関心、なげ  
やり、むしろ憎悪、嫌悪感に近いものを抱いていることに気付いていた。

12月30日もおそく、Byron は Hobhouse と共に、先触れもなく、Seaham  
に着いた。

詩人の——bestman——花婿付き添い役——をつとめた Hobhouse は、最初、  
花嫁 Annabella を一目見たとき、古風な、素朴な女性だとの強い印象をうけ  
た。しかし、挙式の日、2日、までには、Annabella の不思議な魅力が磁  
力にひかれるように、彼の心をぐいぐいとひきつけた。

大晦日の夜、陽気に、Byron と Annabella のために、模擬結婚式 が催さ  
れ、Hobhouse は Annabella に 扮した。そのとき以来 Hobhons<sup>こころよ</sup>e は彼女  
に対して すばらしく魅力的 だという印象を格別、強くするようになっ  
ていった。

しかし Byron の心の中は——

新年、元日の日曜日は、1日中ずっと、挙式ムードのテンポが ぐづついて  
いった。そして、挙式当日の朝、メランコリーな気分で目覚めた。そのと  
き 彼は、Ovid——オヴィディウス (43BC-AD17). ローマの詩人——の心境  
に浸っていた。が、それは、愛に悩む Ovid だったのだろうか、それとも、  
追放の身を悩む Ovid だったのだろうか？

そして起き出て 11時に drawing room に呼ばれるまで 庭内をぶらつき廻っていた。

drawing room には 花嫁 Annabella が peach-stone をつめたクッションに <sup>ひざまず</sup> 跪いていて、二人とも 大変 固くなって対峙した。Annabella は はっきりとした口調で “妻, Anne Annabella です。よろしく。” と言った。だが詩人は、ひっかかりながら “夫, George Gordon です。よろしく” と宣誓した。

Hobhouse は、花嫁衣裳のドレスとジャケットを とても簡素で清潔であると見惚れ、そして 花嫁 Annabella が 花婿 Byron にじっと注ぐ <sup>そそ</sup> その視線を とても美しい と感じ、快く眺めていた。

しかし、そのとき、Byron は——  
‘the Dream’ を <sup>よ</sup>詠んだ 頃の、幼き日の感懷に <sup>ふけ</sup>耽っていた。

……………and he spoke the fitting vows, but heard  
not his own word, And all things reeled around him……

そして 彼は 口にした  
ふさわしい 誓いの言葉を  
だが、<sup>うわ</sup>上の空で、  
その言葉は、自分には聞えず、  
すべてが 走馬燈のように、  
彼の脳裏を かけ廻った。

しかし Hobhouse は そのときの——Byron が “私は 貴女に 私の、こ

の世の、すべての財宝を 賦与します” と、誓いのことばを Annabella に述べるとき、<sup>なか</sup>半ば、不気味な <sup>え</sup>笑みを<sup>たた</sup>湛えて Hobhouse の方へ視線を送った——  
その視線を いつまでも忘れ得なかった。

二人にとって 祝福さるべき 新婚生活の<sup>かどで</sup>門出は このようにして……

Byron の非情、エゴ！

それが、悲劇の女性 Annabella へ向って はっし と放たれた <sup>そや</sup>征矢、第一の毒矢であった！

詩人の対女性観のルーツは “その呪よれた星にある” のだと考えるとき、Annabella のために、その<sup>きよ</sup>浄らかな人間性のゆえに、<sup>あら</sup>新たなる涙をさそわれるのである。

Byron の女性観——

少年の日、彼の<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>びつこのゆえに、人前に出るとき 人一倍 自分の不器量を卑下した。ことに女性の前では、口もきけず 押し黙って伏目勝ちであった。母と乳母から いじめられた<sup>お</sup>育い立ちが 彼をして 女性への恐怖心を植えつけてしまった。初恋を<sup>じゅりん</sup>蹂躪された。じっと耐えた！

女を恐れ、憎む情 <sup>ところ</sup>は そのころより、心の奥深く 黒い蛇の如く <sup>す</sup>棲みつづけた。

しかし、一見内<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>気なるも負<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>けじ魂の詩人は、恐るべき、憎むべき 女性より逃避することよりも、むしろ、全世界の女性を征服しようと 決意した。

少年の頃より、自分の美貌をつくるべく、減食とスポーツによって 心身を<sup>きた</sup>鍛へることへの執念の<sup>ほのお</sup>炎を燃やしつづけた。

“よーしっ！ やっつけてやるぞ！”

俺に服従しない、すべての美しい女性を！”

詩人の Bestman をつとめた John Cam Hobhouse は——

密月旅行へと発つ初々しい花嫁 Annabella の ‘slate coloured’ 青<sup>み</sup>が<sup>か</sup>っ<sup>た</sup> 灰<sup>い</sup>色<sup>だ</sup> の衣裳を すばらしく美しい と見惚<sup>ほ</sup>れながら、この花嫁に どんな感懷<sup>いだ</sup>を抱きながら、その旅立ちを、どのように勇気づけようとしたことであろう！

Annabella は自ら選んだ花嫁衣裳の、その ‘slate colour’ にふさわしい 真摯な人生への哲学を身をもって生きた 浄<sup>きよ</sup>かな、総明な、a blue stocking であり、何者にも 汚され得なかった 高潔な女性であった！

“Miss Milbanke、出発の用意はできたの？”と Byron は 花嫁に問いかけながら、いつもの如く 迷信的に なにか不吉な前兆をハッと そのとき感じた。

次の瞬間、二人が 密月旅行へとむかう馬車の中に乗り込んだとき、Byron は 窓越しに Hobhouse の手をしっかりと握りしめ、いつまでも離したくないほど強く握り続けた。

この ‘honeymoon’ 密月旅行には、その出発の第一歩よりすでに ‘desperate’ な、自暴自棄的、やけっぱちな ものを 孕<sup>はら</sup>んでいて——Byron は、これを、‘treacle moon’ 糖蜜旅行と呼んだが——‘vitriol’ 硫酸 という語を冠するのが もっとふさわしいかもしれない。

身を切るような寒い午後、馬車を駆<sup>か</sup>りたてながら 花嫁 Annabella は 震

えていた。

そして一方、Byron は、終始 Albania の軍歌を歌いつづけ、また、<sup>みづか</sup>自らの憂鬱、不気嫌をむき出しにしていた。

その感懷は——これが、やがて、離婚という終着駅へとたどり着くのだという予感であった。

二人は、暗くなって、Yorkshire 州の、40 マイル離れたところにある Milbanke 家の Halbany 屋敷へ着いた。

さらに、もっと、暗くなって、——二人は夕食はとらないで、新婚初夜をむかえた。

そのときの様子を Moore は Byron の火傷の回顧録として綴っているが——

“おそらく、Dinner の半ばにして couple は 席をたち、Byron は Lady Byron を Sofa にさそい、そして 初夜の Bed に誘ったのであろう。だが——その寝所の中で 赤く不気味な、扇情的、炎が燃えていた。

Byron がハッとして目覚めたとき、新婚、初夜をむかえたベッドのカーテンに、石炭火の赤い炎<sup>ほのお</sup>がめらめらと燃えているのが まっ赤に映<sup>か</sup>っていた。

そのとき Byron は 直観した。

これは 地獄<sup>ごうか</sup>の劫火だ！そして、俺のすぐそばには、Proserpina——プロセルピナ——地獄の女王 が 横はっているぞ！”

初夜を過ぎた翌朝は、書斎で、Annabella からの、寒寒とした あいさつを受けた。

“もう 手遅れだわネ。 何もかも、もう済んだのネ。 もう、引返せないのよ！”

そのとき以来 事態は、ときに明るくなっていった。とはいえ——Byron は、真夜中に短刀を抜き、ピストルを手にして、仮想上の復讐者を探索しながらさまよい、うろつきまわり、狂人を、悪魔を、殺人を、近親相姦を、自殺を、一人の Cain たることを、自称、小児誘拐魔を示唆する奇怪な行動に及んだものの、Annabella には、いくらかの楽しい、幸せな一時を与えた。

Annabella は、Byron が ヘブライ調の詩をかいたとき、それを彼のために浄書してやることを楽しんだ。

また、彼女が Augusta のものまねをすることは、Byron にとって、とてもくつろぎとたのしい<sup>なご</sup>和やかさを与えたようである。

Annabella が Augusta の笑いをまね、又、ふざけて詩人を ‘Duck’ と呼ぶとき、彼は、‘彼女の<sup>りんご</sup>林檎<sup>ほほ</sup>の頬’ という意味で、彼女を、‘Pipin’ という pet name でこれに応じた。

ときどき Byron は、自分の ‘Child side’ 小児の如き一面——Augustaが、彼の内なる この一面をひき出したのであるが——に戻って、自らを ‘poor B—poor B’ かわいそうなバイロン——まづしいバイロン’ と呼ぶのだった。

そう、みづからを呼ぶとき、そのことによって、不気嫌なムード、落ちこみムードのときでも、代償作用によって、心が<sup>なご</sup>和むのがつねだった。

Byron は Annabella が——

Dryden の Don Sebastian<sup>14)</sup> を読んで、恐らく、‘incest’ 近親相姦のことをしらべているのだらうと知ったとき——

(彼女が、夫バイロンの近親相姦のことに疑惑を抱き、悩み、Don Sebastian を読んだということは当然、考えられることである。というのは、1616年7月、Augusta あてに、“二人の仲を疑うと結婚の最初の週以来ずっと、私は、狂わ



んばかりの気持に駆りたてられるのです”と手紙を書き送って、その意中を訴えている)——Byron は、Annabella の頭上に短刀をふりかざした。それにもかかわらず、Annabella は とても無邪気に Byron を見上げたので、Byron は次第に心が和らいで うちとけてくるのだった。そして、こう、言った。

——“僕に 天国の存在を信じさせるものがあるとするならば、それは、この瞬間の、今の、その、君の純真無垢の表情だけ である”——と。

Note 4)

King of Portugal, Dryden の悲喜劇。

1689年、初演 1690出版。

ポルドガル王 Sebastian (1554～98) が Alcazar の戦後なお生存しているとの伝説に、よったもの。彼はムーア人 Muley Moluch のため殺されるところを、元の廷臣 Doray に救われ、Muley の死後、その国を治めることになるが、恋人 Almeyda が実は、自分の血を分けた妹であることを知って隠者となる。

また、あるとき——詩人は

暖爐に水をぶっかけて、炭酸ガス中毒のため窒息死せんばかりになったことがあった。そのとき、詩人は、‘死神と悪魔 Old Nick の お呼びだと思った’ののだが、Annabella が これを救った。

Byron は 慈愛にみちた、しみじみとした口調で、Annabella に語った。

“恐らく 僕は 君の衣裳の裾<sup>すそ</sup>をしっかりと握りしめていれば、きっと天国へ行くことが できるだろう。”

そして これは、まさしく Annabella の、願いだっただけ。

——AはBを導いて 天国へ行かせることを自分の使命と考え、終始、Byron のために、献身すること——それを 生涯の第一目的として 彼女のすべてを賭けて 新婚生活をスタート したのである。

二人は 1月も終り頃 また Seaham へと帰り住んだ。二人は、腕を組み合って、荒れ狂う冬の海辺の波うちぎわを散歩しながら、波の目がじっと空を見あげるとき、空には心があると Annabella はしみじみと感ずるのであった。

しかし 3月までには Seaham も、Byron にとって 退屈<sup>たいくつ</sup>な場所 となつてしまった。というのは、その、すべてのものが、——牧師<sup>だち</sup>達、メイド<sup>たち</sup>達、——彼の少年の頃、過した Southwell に生き写しの町だったから。

1月21日から3月9日まで滞在した、Seaham を発ち、ロンドンの Piccadily Terrace 13番地の新居に迎う。

途中、詩人は Augusta のすむ Six Mile Bottom で 12日から28日迄約2週間あまりを過した。

Annabella は、Byron の意志<sup>きか</sup>に抗<sup>か</sup>らって 是非にと彼と行動を共にすることを主張した。

そして Augusta を<sup>まじ</sup>交えての、三人の新婚生活がしばらく続いた。

Byron は既に、Annabella を愛し始めていた。そして、この三角関係において、詩人の 'diabolical' 悪魔的一面のみが 盛んにあふられるのを自らはつきりと Byron は感じとった。

しかし Annabella は、——  
Augusta には 今までまだ会ったことはなかったのだが、彼女に対する疑念のみでなく、彼女へとつなぐ希望的面もあった。即ち、  
“この二人の姉と弟が、共に私の衣裳の裾をしっかりとにぎりしめることによって、共に天国へ昇天することは可能なことではあるまいか”と。

しかし、この二週間余を Six Mile Bottom へと途中立寄ったことは、実に、この二人が底知れぬ深い絶望的泥沼へと第一歩を踏みこむことになったのである。

Six Mile Bottom での生活は、全くの 地獄と化した。

Newstead の彼の所領の売却方が進展を見ず、例の如く、見込があまりないという便<sup>たより</sup>が彼を待っていた。これを知った Byron は、激怒し 癩癩を立て、そのとぼ<sup>と</sup>ち<sup>り</sup>は、先ず、Annabella に向けられ、彼女<sup>はづか</sup>を辱しめた。彼は彼女を早く、独りで寝るようにと、閨房<sup>か</sup>へ駆りたてた。

“私たち (ByronとAugusta) は、君が、‘私の魅力的な人’、Charmer であることを望んではない”と言った。

Byron は 自分と Augusta のために、おそろいの、ペアの十字を刻んだブローチ を特に注文した。

“このブローチが何を意味するか を Annabella が知ったら、君は Newstead での私達のサイン<sup>おほ</sup>を憶えているか” と Augusta に私語<sup>ききや</sup>いた。

詩人は Anna bella の目の前で、はばかりず、“Augusta は Knickers——ブルマーに似た婦人用下着——をつけるのが好きだ”と告げるが如き とても下卑た言動に及んだことも、しばしばだった。

後年 Annabella は——

“私は Augusta の胸に 短刀を突きさすことができたらな— と思う瞬間がたびたびあったのよ”と洩<sup>も</sup>らしている。

徐々に 詩人の欲求不満と激情は嵩<sup>こう</sup>じてゆき、それは、Augusta と Anna-bella の二人へとむけられた。そして、二人は、Byron に対して結束して、相対し、よりそう仲となっていた。

Byron は、消化不良、胃弱を magnesia で癒やし、酒びたり となってその悔恨をやわらげようとした。

Byron の暴力行為の大半は酒のなす所業であった。

このような生活の中で、Annabella は、自分が妊娠したことを知り、Napoleon が Elba 島を脱出したことを知った。

何はさておき、自分も、兎に角、Six Mile Bottom を脱出せねばならぬ。そして、それは、特に、生れ出るであろう我が子のために そうすることが急務だと感じた。

Annabella は、詩人が Hahnaby で彼女に告げたこと——

“自分は Zetuco<sup>5)</sup> である” という一言が、どうしても<sup>ひとこと</sup>念頭から離れることができなかった。

Note 5)

John Moore の Gothic novel の中の、悪玉のヒーローで、自分の赤ん坊を、近親相姦によって生れた子であると信じて絞殺した。

Augusta は——

これ以上の恐怖に耐えかねて、遂に、意を決して 3月28日、Byron と Annabella を、ロンドンの Piccadilly Terrace 13番地の新居へ移すことにした。

そして この修羅場は好転してゆく。

この新居は、Hyde Park Corner を背にした、Green Park に真向う場所にあり、現在、Byron の像が立っている。

Byron は、13という数字を嫌ったが、ともかく、それは‘素晴らしい’大邸宅で、その屋賃は年間700ポンドであり、これは、Annabella の結婚時の夫婦財産契約2,000ポンドをやがて蕩尽してしまうであろう額だった。

Byron の気分も次第に好転していった。そのときのことを“10日間は、今迄に私が見たことがない程 Byron はとても親切で優しくかった”と Annabella は後に回想している。

それから——新婚生活にとって、死の願望に似たものに思えたが——Annabella は Augusta を、新居にやってきて逗留してくれるようにと招いた。

これを知った Byron は

“新居に Augusta を招き入れるとは、全く、お前は、愚か者だ”と激怒した。  
“そして、このために、いろいろな意味で、お前の生活が激変してくることをやがて知るだろう”と言った。

姉 Augusta を新居へ迎えたときの“輕蔑的眼差し”もまた、徐々に、Annabella への、“これ見よがし”の視線へと変わっていった。

何故に、あの総明な Annabella が、このような愚挙を取えてやったのだろうか

彼女には、それなりの、色々な理由があった。

“二人を、いつまでも、切り離しておくことは絶対に不可能だったのよ”と後に書き送っている。

“私の考えでは 二人が罪を犯さないように——近親相姦をさけるように——しておく、ことは絶望的ではなかった。事実、危険な断崖の縁<sup>ふち</sup>に立った二人のために、私が自ら<sup>みづか</sup> 守護神たるべきであると自覚したのです。そして、そうすることで、私自身の、最も、みじめな、屈辱の立場を忘れようと<sup>のぞ</sup>希んだのです。”

Annabella が、自ら<sup>みづか</sup>、救世主的、激しい情熱にとりつかれ、二人のために、<sup>もすそ</sup>裳裾を捧げようとしたことは、いかにも 明白だった。Byron と Augusta のために、自ら<sup>みづか</sup>、生きながら死の苦しみを甘受しようとする覚悟ができていた。

Byron——Annabella の、この悲劇的、立往生の姿の、諸の原因をさぐるとき、それぞれの人生観が演じた大きな役割を看落すことはできないであろう。

Byron 夫妻はどちらも ある意味では神の信奉者であった。

Halnaby で Byron は Annabella に、こう言ったことがあった。

“最も不幸なことは、私が神を信ずることである”

しかし、彼の背景的な信仰は、Calvinistic カルビン教——幼児期、乳母の May より、教えこまれた——の影響をうけた、暗<sup>くら</sup>いものであった。そして、ときに、18世紀の無神論が カルビン教の毒気を消散させたとしても、しかも、その毒気は、妖気は、また、再形成されるのであった。

Annabella は 典型的、北部の知性的女性であり、両親より、特に、愛され、大切に育てられ、異色の教育を受けた。

厳しき、敬虔さを身につけた彼女は Hannah More タイプのインテリ女性で、名門の子女と生れた幸運のお返しとして、世の為に献身するべく教育されてきた。

この Hannah More 的教育の洗礼を受けた Annabella は 亜流的宗教信仰ではなく、the Methodists, Quakers, Unitarians の如き社会的先覚者たること、Elizabeth Fry, Florence Nightingale, Harriet Beecher Stowe の如き傑出した19世紀の女性 たること、自分の生涯の使命であるとの自覚をはっきりと 抱いていた。

しかし、この Hanna More の精神が、パトロンの精神、自己犠牲、寛大な精神の女性へと発展してゆく可能性も十分あり得ることで、Annabella の場合も、そうであったことが 考えられるのである。

Byron の場合、不気味な笑<sup>え</sup>みをうかべ、このような考えをはねつける一面があった。

Annabella にとって、Byron のもつ魅力は、18世紀が19世紀へとむかう新しい時代<sup>時代</sup>感覚、移行<sup>移行</sup>感覚であった。

あるときは讃嘆的に、あるときは批判的に、あるときは共鳴的に、あるときは懐疑的に、心は揺れつつ、かきたてられる感情のままに Byron は、一つの時代が、他の時代へと移りゆく、その時代精神の移行<sup>みずか</sup>を自ら実践<sup>せん</sup>しつつ、またそれを作品に描こうとした。

この春、Byron にとって ロンドンの生活は耐え難いものでなく、ほとんど毎日、Albemarle Street の John Murray のところに立ちよった。

そして、そこで、はじめて Walter Scott に会った。

この二人の跛<sup>びつこ</sup>の詩人は、朝の集会が終わると、跛行しながら、階下へと降りてゆくのだった。そして二人の親交は変わることなく、Byron の仕掛ける、いたづら、煙にまく言動、二人の宗教、政見の異なっていたにもかかわらずますます、肝<sup>かんたん</sup>胆 相照す仲へと、その親交は 深まっていった。

the romantic tory (保守党員) の Scott が the Liberal 自由党員の Byron に すっかり傾倒したのも充分うなづける。

いずれにしても Byron の政見は、はっきりと根を下ろし しっかりと定着したものではなかったと みてもよいだろう。そして、その宗教観も又、そうであった。

Scott が Byron の 改宗を予言したとき、Byron は 厳しい口調で言った。  
“君もまた、僕が Methodist に改宗すると、予言する者たちの一人だろうと思う”

“いや”と Scott は答えたが、もっと通俗的でない宗教への改宗を考えていた。  
“僕はむしろ 君が Catholic の信仰へと後退し、罪ほろぼしのための懺悔<sup>ざんげ</sup>の禁欲生活によって頭角をあらわすことを期待するよ”といったとき、Byron は  
“そしたら、僕の生<sup>き</sup>き態<sup>ざま</sup>が正しいと認めてくれるようだな”と逆襲して にっこりと 微笑<sup>わら</sup>った。

Scott は Byron に 金をちりばめた短刀を、Byron は Scott に アテネ人の骨の、いっばいつまった 銀製の花瓶<sup>かびん</sup>を 贈った。

この不吉な贈物の交換を 世の人々が知ったら 何と行って 騒ぎ立てるだろうかと、考えて 二人は顔を見合わせて カラカラと笑った。

ときどき Byron は 彼の贈った、そのアテネ人の骨<sup>こつぽ</sup>壺の如く 陰鬱なムードにおちいった。 そのようなとき、この年長の——Byron より17才年長の——Scott は、霧が、ある風景より立ちのぼってゆくように、Byron の表情より

その暗影<sup>かげり</sup>が消えうせるときを、じっと待って 二人のお互の会話へと引き戻したものだ。た。

また、Byron が、もう一つの弱々しさ——いろいろさせる暗示と覚<sup>おぼ</sup>しきものにたいして 理由<sup>いわれ</sup>なき 疑惑の始動——を示した場合、効かなくなったスプリング、バネの如く、沈滞する不活潑な一瞬の心を、はっきりと、生き活きと始動するように、仕向けることは、実に Scott の名人技であった。しかもそれは、ものの一分もすればものの見事に、Byron の心は 活潑に始動したものだ。た。

もし若き Lady Byron が、Scott 卿のこの Byron 操縦術 を、会得して いさへしたら……。彼女にこの、こ・つが会得されていさへしたら……。

If only young Lady Byron could have had the same knack……

Annabella の育<sup>はぐく</sup>まれた宗教教育による自己献身の精神にもかかわらず、その結婚生活の破綻<sup>たん</sup>という悲劇のやがて到来するであろうことへの素因を そこにうかがうことができるのではないだろうか。それは たしかに 明言できることであった。

従僕 Fletcher は しみじみと述懐した。

“私の仕えた、この Lady, Annabella 若奥様ほど、殿<sup>との</sup> Byron を御するに不器用だった御婦人には、今だかつて お目にかかったことがない”と。

この新婚生活の時期、Byron にとって もう一つの興味関心は、the Drury Lane Theatre であった。

それは今、B 自身を含め、Samuel Whitbread MP, John Cam hobhouse, the Honourable Douglas Kinnaird—Cambridge 時代の学友——達、血の気の多い Radicals の運営下におかれていた。



Hobhouse と Kinnaid が 台本を書き、Kinnaid が ‘mob dinners’ として有名な大集会を指揮していた。

さらに、かの有名な悲劇俳優 Edmund Kean が1814年、突如として Shylock を演じて以来多少、落目気味だったこの劇場に活を入れたところだった。

Byron は 運営分科委員会の一員として、——新婚の、この時期のトラブルをよそに——この魅力的奉仕活動に献身した。

“色々の舞台場面を、私は、徹底的に検討しなければならぬ。シナリオ作家たち、女流作家たち、婦人帽子屋たち、熱狂的アイルランド人たちが私のところへ次々と殺到してくる。私は、ていねいに 応待して、その意見を 一つ一つ聴いてやらねばならぬ。シナリオを読んでゆかねばならぬ。

これらの ‘strutters and fretters’

気取り屋の五月蠅<sup>うるさばえ</sup>——Byron は actors たちをそうよんだが——のひしめく間で、自ら<sup>みづか</sup>を、制御できたのに、もし、自分がその気になりさえすれば、望んだならば、妻 Annabella を、どうにでも 処理できたものを——

事実 彼はその気持を、自分の癩癪<sup>ざんげ</sup>が、その結婚を破滅させたのだとしばしば、懺悔<sup>ざんげ</sup>し、告白している。

事実、この春夏は、Byron は 自分と Annabella の新婚生活のトラブルを世間にひたかくしにして 知れないようにすることに成功した。二人が一緒に手を組んで外出するとき Byron の妻への 優しい心づかいに 世間は 注目し羨望の眼をむけた。

それは——

詩人の演劇術における手腕のみならず、<sup>きち</sup>機智に富む性格の一つのあらわれだったのである。彼が焦ら立たないときは、その、いたずらっぽさ、茶目っ気、ジョーク、<sup>ひらめ</sup>機智、優雅さが、火花の如く 閃き 飛び散った。

若き日の、歴史家 George Ticker は Byron の “人を<sup>よろこ</sup>びさせる” 本能 instinct を観察して、天才的であると看破した。

Ticker は Piccadilly Terrace の新居に温かく迎えられたとき Lady Byron へ示す Byron の愛情に すっかり魅せられてしまったほどだった。

6月18日、突如、Waterloo の大勝利が報導された。

“ねー、あなた、ねー、すばらしい勝利だったのね。Buonaparte は完全に敗北したのね。”

Annabella が、うわずった声で そう言ったとき、Byron は一言、ポッリと答えた。

“ああ、あー、大変な戦だった！ Buonapart は敗れた！”

僕は——僕は、そのことが、むしろ、とても悲しいんだ！”

そしてこう、つけ加えた。

“僕は、自分が、まさか、Lord Castlereagh の首が、棹の上で<sup>さら</sup>曝しものになる日まで、生きのびようとは 思いもしなかったのに。

しかし今——。僕は、それを見たくない、見まい、と思うよ”

しかし Byron は、結局、the Foreign Secretary が、自らの手で自らの喉をかき切ったという噂を、生きのびて 結局、耳にしたのである。

そして一方、Byron の 周辺は、——

Webster 夫妻、そして Caroline を含め——この戦勝の故に一斉に Paris へと注意を向けた。Byron は Webster に、‘mad and malignant’ な Caroline とは 情事をもつことをやめるように、縁を切るようにと、警告し、生れたばかりの、Webser 夫妻の赤ん坊のために、名付け親となってやった。

6月中旬、Annabella は、Augusta に対して、新居より 出て行って欲しい旨をつたえた。

Annabella としては、Byron との水入らずの新婚ムードを たのしみにかったのであろう。

“私達二人の間では、とるに足らぬ、ささやかな会話があって それが Byron の心を和らげたのです。不安を取り除いたのです。”

このような子供っぽい会話の中で、Byron は、最も深い、心の内なる想いをのべ、そして次の瞬間には、陽気にはしゃぎ、 かるやかに振舞い 活気づくのがつねだった。

Annabella は Byron の、このような <sup>つか</sup>東<sup>ま</sup>の間の、浮かれ気分をよろこび うっとりとした。“そして 私には この 明るい きらめく Byron の mood の発散が、‘私たちの夫婦の今の生活’という‘苦海に浮かぶ<sup>うたかた</sup>泡沫’に思えるのです”

しかし それは 彼女の思想的錯誤だった。

‘苦悩という大海に浮ぶ<sup>うたかた</sup>泡沫’と言った彼女の直喩 は、彼女が Byron を——その表面だけが ときに 輝く暗い大海原のようだと考えたことを示している。

Walter Scott 卿は Byron を評して——“わづらい悩みながら、澄み切った泉から流れ出て、再び苦悩の世界を流れゆき、<sup>きよら</sup>浄<sup>みなもと</sup>かな 源 へと ひきかえす、その循環をつづける永遠の泉”——だ、とのべた。

この metaphor 隠喩こそ Byron の 真の姿を伝えるものであろう。

Augusta が去った後も さらに 別の 未解決の問題が 残されていた。それは、押しよせる 債権者たちであった。

4月、最初の債権者が、一匹の狼の如く突如 姿をあらわした。

Annabella の伯父、Lord Wentworth の死去により 彼女がその後継者と  
考えられたことにより、——Piccadilly の Byron 邸には遺産の大金が舞い込  
んだものと 憶測 されたためだった。

事情は 全く 異なっていた。

Wentworth の遺産は、先ず、Milbanke 夫妻が これをうけつぎ、  
Wentworth 家の家名も承けつぐことになった。

Byron が 自分の屋敷に降り立つときは、きっと玄関先で執拗な債権者の取  
立てに攻めたてられた。

8月初旬、Newstead と Dochdale の 屋敷が 競売にかけられたが、Byron  
の希望の条件額に達せず、売却できなかった。そのため、不安は <sup>つ</sup>募りゆく  
ばかりで、家庭では、いらだち、激怒し、狂乱することが多くなった。

そのため劇場での仕事に のめりこむことがせめてもの憂さ晴らし、心の慰  
さみ、であった。そして そこに Susan Boyce という美しい、若い愛人が  
いて たのしい、<sup>ひととき</sup>一時を過すことが <sup>しあわせ</sup>せめて のこされた 幸福であった。

Annabella の産月が近づくとつれ、Byron は 彼女との <sup>セックス</sup>性的 <sup>よろこ</sup>びを奪  
われゆき、<sup>めいてい</sup>酩酊して帰宅する夜が多くなっていった。そして男色にはしった  
のだという風評もたった。

ときどき、何日間も、口をきかないこともあり Annabella は 書斎に入っ  
てきて、“私がお邪魔なのかしら？”と問いかけた。

“うるさい、”と Byron は叫んだ。

だが、それは <sup>ひど</sup>酷い仕打ちだと悟ると、すぐに、そのことを <sup>わ</sup>詫びた。

10月の終り、Byron は Moore に、

“Lady Byron は だんだん身重となってきたが、順調にいつている” と書  
き送った。

11月初旬、Annabella は Augusta に書き送った。

“私が Byron に対して抱く恐怖感について、私の意見を お伝えしたい。

私には Byron の 病的な性格が 日に日に、はっきりと理解できてくるのです。Byron の不幸は、習慣的に身についたものなのですが、興奮状態にかられることを求める激情 なのです。それは一彼の、激しい情熱の中に見出されるのですが、その場合、彼の追求することが 十分に 徹底的に組織化されていないのです。狂乱はそのためなのです。”

——事実、彼は‘自分自身’を組織化して “The Sieze of Corinth” を書きあげた。その中に

Some are restlessly at home と うたわれた一行がある。

Annabella は さらに続けた。“自虐することへの愛は 主として この源から生れてくるのです。飲酒も、ゲームに耽ることも すべてこの同じ源から生れてくるのです。”

数日後 Annabella は、Byron の 激しい癩癩の新しい原因を発見した。

執達吏が はじめて No. 13 の 彼の新居に のりこんで来て そこで 眠った。

Byron は 威嚇的 おどし文句を叫びながら、“すべては 自分の意志に反して結婚した Annabella の責任だ” と責任を転嫁<sup>てんか</sup>しながら 家から飛び出していった。

“以前は、事態がこれほど悪化したことはなかったのですが、先週の土曜日——そのとき Byron は Kinnaird 劇場の party で 朝の4時半まで飲み明かした——以来、彼の精神状態は尋常ではない、と思われます。”

Annabella は Augusta にそう告げた。

“従兄の George A. Byron が 執達吏<sup>あざわらつ</sup>を嘲笑<sup>あざわらつ</sup>て詩人のために放逐してくれ  
さへしたら……

Byron は—— いかなる人間も、いまだ、かつて、このようなショッキング  
なことを 経験したことがないほどに 逆上したふるまいに及んだ”

しかしながら、そのような 大変な見当ちがいの あやまち をおかしたの  
は、むしろ Annabella の方で、それは大変な観察ミスだったのである。

Byron は 詩人だった。

1 ヶ月後に Leigh Hunt に書き送ったように

“詩人は、不安な肉体の中に 不安な魂をもつ。”

——Collins は、Chatterton は、そして Cower は 狂人であり、Pope は  
せむし 僂僂であり Milton は めくら 盲人 であった。

Byron の場合——

‘借財と跛の屈辱’が 高揚せられたとき ‘過度の恐怖’へと変えられてゆ  
くことは ありうることだった。

そんなとき、心のままに放置されれば‘悩める海’は 嵐<sup>な</sup>いでいったであろう  
のに。

しかし Annabella には、おびえる Byron の不安をかきたて あふる こ  
としか できなかった。彼女のもつ超人的平静心の持続は、かえって、Byron  
の痼癪、狂気を あふりたてていった。

Byron は、あわれみと不安で じっと見つめる、Annabella の 視線 をと  
らえるのがつねだった。

秋になって——Hanaby での夜がそうであったように——Byron は、悪夢  
にうなされ 仮想敵に対し武装し 夢遊病者のように ぶらつきまわる夜がま  
た始まった。

たしかに、この13番敷屋には、多くの人々が入りこんでた。

Annabella は 独力では Byron を制御できないことを知り、ふたたび Augusta に 移り住んでくれるように要請した。

はたして、Byron は この二人に対して 毒づき始めた。

Augusta が、こんどはこの屋敷内の morale を 回復すべく いとこの G. A. Byron に、移り住んでくれるようにと要請した。

Annabella の安全を守るために、召使たちによって ボディーガード 団が結成された。Clermont 夫人、Milkbanke 家の召使たちは Annabella の隣室で寝た。

このような状態で Annabella が 実家へ帰ることなく、なお屋敷に踏みとどまっていたのは、Byron の希望によるものであったが、やがて彼は 彼女をスパイだと考え始め、彼女を ‘Honest-Honest-Iago’ と呼び始めた。

Annabella の寝室の外では、助産婦と Fletcher が 夜通し 交互に 見張り番をつとめた。

“私は男の子が欲しい” と 9 月 Byron は Webster に書いた。

Annabella の陣痛のはじまる 3 時間前、Byron が 彼女の産室に暴れこんで、“彼女が死ねばよい” と 癪高く叫んでいるのを彼女は 憶えていた——いや、それは 彼女の錯覚だったかもしれない。

彼女が産褥にあって 産みの苦しみと格闘しているとき Byron は 産室のすぐ下の部屋で ソーダ水を <sup>へや</sup> ガブガブ飲みながら 胃痛を抑えていた。

そして その bottle の栓を天 <sup>せん てんじょう</sup> 井めがけて故意にほうりなげていた。

そのような、風評も 流れた。

12月10日 女兒 Augusta Ada が生れた。

そのときも ぞっとするような 噂が乱れとんだ。

Byron は 産室に入る前に

“その児は死産だったのだ、ネ” といったという……。

無論、彼は これを、Hobhouse に対して 力強く否定した。そして Mrs Clement も彼の娘 Augusta Ada へ示した愛情については、これを証言した。

Byron が、Ada の揺り籠の上に のしかかるようにして

“ああ、Ada よ、お前は 私に 何という責め道具をあたえたことだろう、”  
というのをききいりながら Annabella の心は、冷えてゆき、二人の間が遠く  
離れてゆくを感じたことであろう。

このような陰悪な状態も、もし、債権者たちの殺到がなかったとすれば、救  
いの道は、あったかもしれないだろう？

Byron は Piccadilly Terrace で 一家がもはや 体面を保って 暮すこと  
は到底できないと 決断した。

こうして、Annabella に、早急に都合のつき次第、Ada をつれて Went-  
worth の、両親の実家へ帰って暮すようにと、Byron は命じた

そして、Byron 自身、この屋敷をたたんで整理のつき次第、後から行くこと  
に決定した。

この決定は、むしろ、Annabella にとってチャンスの到来だった。

彼女は、長い間、Byron が、その借金苦の故に、酩酊の故に、悔恨の故に、  
狂気へと駆り立てられてゆくのだ、と考え続けてきた。

そして今娘 Ada の将来を案じた。

1月8日、Annabella は Dr. Mathew Baillie——Byron の幼少時、彼の  
跛の足を診察したことのある医師——から 彼の病状について相談にのってもら  
うために 話し合いの場をもった。

“夫、Byron を狂気から救う道が、はたして あるのでしょうか？”と Anna-  
bella が尋ねたとき、



Dr. Baillie は、<sup>みずか</sup>自らは、はっきりと 断定し かねて、Annabella の侍医である Francis Le Mann に、Byron と会うこと、個人的に それとなく診断してほしいと 要請した。そして一任した。

そして Dr. Baillie は、Annabella 自身に対しては——すみやかに No. 13 の屋敷を退出して、実家で、その診断の結果の報告を待ったほうがよい と忠告した。

Byron が、自室で Annabella を 最後に見おさめたのは 1月14日のことだった。そこで 彼は Augusta と 坐っていた。

彼は——  
<sup>わかれ</sup>袂別のために Annabella がさしのべた手を 無視する如く 押し返して 皮肉をこめて 言った。

“私達三人は どこで また 会うことに しょうか？”

“きっと 天国で ですワ。”と 彼女は<sup>こた</sup>応えた。しかし 嗚呼、Byron は Annabella の<sup>もすそ</sup>裳裾をしっかりと掴んで 天国にゆくことは ないであろう！ 遂に、その日は来なかった！ <sup>わかれ</sup>これが二人にとって 永遠の別であった！

Annabella にすがって 天国へゆくことが Byron の切なる願いであり、Annabellaこそ、<sup>さすら</sup>漂泊い、たゆたう、病める、この、憂愁の詩人にとって 救いの女神であり、そして温かく、滋愛にみち 差しのべられた 優しい手であったのに、

翌朝、the honeymoon carriage——密月旅行のときの、あの馬車——が、今永遠に彼女をつれ去ってゆく<sup>べ</sup>可く 用意された。

Annabella は Byron が 起き出る前に 階下へと降りていった。彼女の室

の前には もう 見張り番は 立っていなかった。

その代りに、彼の部屋の前には mat が置いてあり その上に 彼の愛犬の Newfoundland 犬が いつもの如く ねそべっていた。

“一瞬 私は その mat の上に <sup>からだ</sup>身体ごと、投げ出したい衝動にかられた。そして、あらゆる危険に仕えようか！ この身を捧げようか！ とためらった！ だが それは ほんのつかの間の思い だった。そして 私は寂しく、そのそばを通りすぎていった！”

彼女は そのときのことを回想する。

この二つの場面——最後の訣別のときの Byron の態度、馬車にのり込む寸前の瞬間的 Annabella のデレムマ——それは Byron を要約するものである。

悲劇のヒロイン Annabella!

彼女の心は 天国と doormat の間で揺れた。高揚と絶望の間で揺れた。

彼女は彼のために、立ち直るための<sup>・</sup><sup>・</sup>勧告の<sup>・</sup><sup>・</sup>ことばを、いや、へりくだった<sup>・</sup><sup>・</sup>忍従<sup>・</sup><sup>・</sup>をも、いずれをも 提供することが出来たであろう女性であったのだが！

Byron は しばしば <sup>みづか</sup>自ら そのことを口にしたのであるが——

Byron が必要としたものは、a gentle guide 優しい手の導き によって いつのときも、あやつられ、<sup>きよ</sup>御せられ てゆくことであったのだが。

それは 悲しい離別だった。離別はつねに傷ましい。だが——そのルーツを<sup>さぐ</sup>探るとき、 離別すべく用意された二人の出会いに、その宿命的悲劇は すでに仕組まれていたことを Annabella は 顧みながら、この短かかった新婚生活 が どのような感懷をもって 彼女の心を今、去来していることだろう。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.